

# 「<sup>みみ</sup>耳」をめぐって

村石 理恵子

## 王様の耳はロバの耳？

日々の保育の中には、感動することがいろいろあります。自分の見たことや感じたことを誰かに伝えたい、と思うような感動です。「縄跳びを毎日練習していたAちゃんが今日跳べるようになって

た」「Bちゃんは、悲しんでいる友達のためにそばでじっと待って話を聞いてあげていた」「CくんとDくんが気持ちを出し合って、けんかをしたけど、すっきりと仲直りした」。このような姿を見ると、「そうそう、いいぞ！」と保育の中で直接その子達に私の気持ちを表すだけでなく、誰かと

感動を分かち合いたいと思います。その第一の対象は、一緒に保育をしている同僚です。「聞いて！　こんなことがあったの！」という私の発言を聞いてくれる同僚がいることは、嬉しいことです。話を聞いて「それはすごいね」と、一緒に感動してくれると、子どもたちの成長を一層強く感じられます。

また、子どもの姿に感動したことだけでなく、援助や環境の構成のしかたを失敗することも多い私にとっては、その失敗を聞いてもらうこともあります。「そういうこともあるよね」の一言で肩の力が抜けたり、「私なら、こうしたけど」という次回に向けての解決のヒントを得たりすることが多くあります。しかし、失敗を言いたくなくて、飲み込んでしまうこともあります。穴を掘って、一人で叫んで土をかぶせてしまいたい、という気分です。それがバネになればいいのですが、

一人で暗い気分になり、落ち込みを更に助長してしまうことも多々あります。「しまった……」と思うことのうち、同僚に伝える方が自分にとっても相手にとっても、失敗を生かしていくのによい場合は、むしろ積極的に話した方がいいと思われまふ。恥ずかしいエピソードも多く抱えながら、保育について感じたことを表すことが、必要だなあと思っています。

### 耳をすます

ある年、難聴の子どもの担任になりました。彼女は、聞こえにくさを補聴器でカバーしながら、周囲に感性のアンテナを張り巡らしていました。やろうと思ったことに自分から突き進んでいく力をもっていました。その力に感嘆しながら、私は担任としてどんなことをしていったらいいか……、始めは本当に手探りでした。

そこです、気づかされたのは、私自身の言葉への依存です。例えば「次に手紙を取りに来て、もらったらかばんにしまつて座りましょう」といった指示的なことや、「さつき、EちゃんとFちゃんが喧嘩したのはこういう理由だったの」という説明的なこと、「今泣いているGくんは、こんな気持ちだつて」という感情の姿への共感など、あれもこれもと、私が流れていく言葉にいかにか頼っていたのか、ということ。思い知らされた、とすべきでしょうか。彼女の「今何を言つたの？」という眼差しに何度も「ごめんなさい」をしました。

失敗の経験と同僚のアドバイスによって、まず、目を見て話す状況であることを示してから話し始める、口元をはっきりと見せる、ということから改善を始めました。そして、教師として何を伝えたいと思っているのか、それを明確にする、

ということの重要性に気づかされました。ポイントをもって伝えたいことを効果的に表現する、ということ。仕事や表情、絵に表した表示などが、多くの情報を伝えるということ。そういった自覚や工夫は、彼女のためだけではありませんでした。

日々を過ごしながら感じたのは、一人にわかってもらいたいという気持ち、他の子どもたちにも伝わるということ。本当に伝えたいことを真剣に相手に向かって伝えればちゃんと伝わる、伝え合いたい関係ができてくる、そういうことを感じる事ができました。耳をすませば、他のアンテナの感度も上がっていくようでした。そし



て触れあった気持ちがそこに確かにある、と実感することができました。

トントントン、何の音？

あぶくたつたは、わらべうたのもつ素朴なやりとりが含まれていて、楽しい鬼遊びです。三歳児と一緒にやるとき、「トントントン、何の音？」

「風の音」「あー、よかつた」のやりとり、繰り返し返しが楽しくて、その部分ではわくわくした表情や次は何？と耳をすます姿が表れます。「風の音」

「雨の音」「雷の音」といった自然現象を盛り込む中で、子どもたちが気に入ったのは「花が咲く音」です。子どもたちが鬼になると、決まって出てくるフレーズとなりました。「花が咲く音って、どんな音かな？」と聞くと、手の平を広げ「パッ」、人差し指を縮めてからゆっくりと「ぼ」、腕まで大きく広げて「パッ」など、その

子なりの音が仕草や表情と共に返ってきました。その子なりのその開花の音に耳を傾ければ、その花独自の美しさが伝わってくるようです。どの花も咲くことの喜びが伝わってきます。ああ、なんて素敵なんだろうとこちらも笑顔になりました。

「<sup>みみ</sup>耳」をめぐって考えると、以上のような「みつつ」のことを思いました。日々の小さな音にも耳を澄まし、子どもたちと共に感動を味わっていきたくと改めて思いました。

(東京学芸大学教育学部附属幼稚園小金井園舎)